

DevOps, Open Source and Business Agility

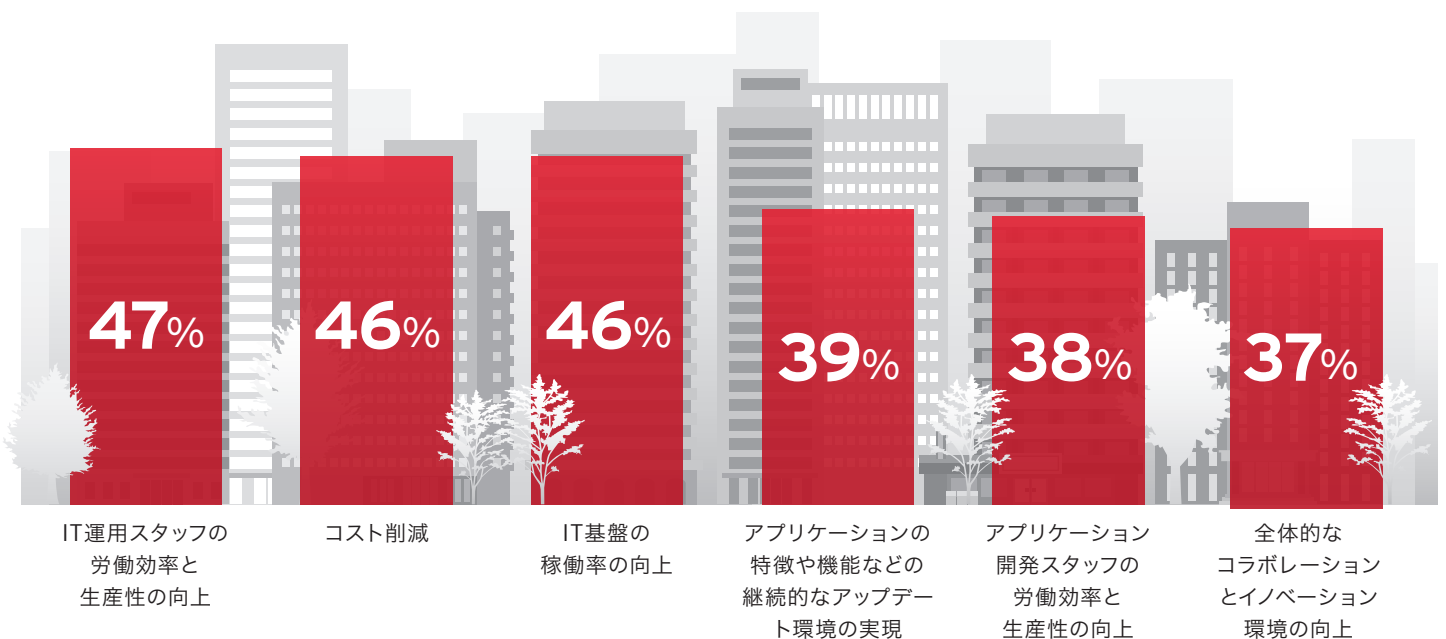
コストダウンとライバルを出し抜く俊敏性。
10年後の未来を築くために、
今、企業がコンテナプラットフォームで
DevOpsを実現すべき理由。

DevOpsのゴール:

**先進企業の約半数がDevOpsのゴールに
IT運用の効率性と生産性の向上、
また効率化によるコスト削減を掲げている。**

DevOpsの効果を開発とデプロイの素早さと捉えているケースも多いが、DevOpsに取り組んだ先進企業がそのゴールに掲げているのは、IT運用の効率性(47%)と生産性の向上(46%)、そして効率化によるコスト削減(46%)である。最適なコストで最新のITサービスを実現し攻めのデジタルビジネスに転じる。それがDevOpsのゴール。

御社におけるDevOps戦略の基本的なゴールはなんですか？



数字が語る真実:

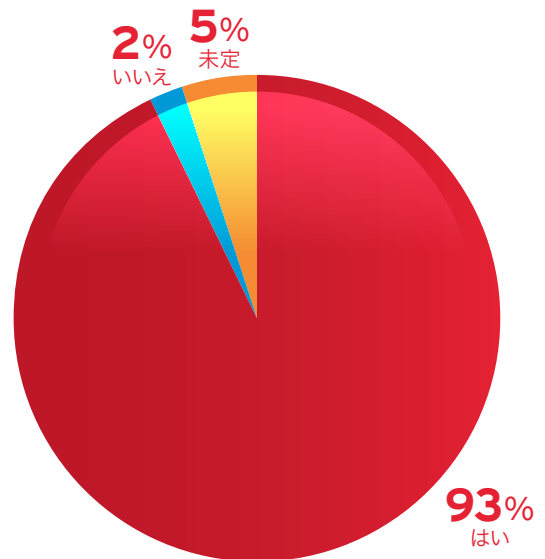
DevOps 成功の扉を開くカギは、テクノロジーの進歩と信頼が担保されたオープンソースにある。

93%の確信:

DevOpsを推進するには
新たなテクノロジーの活用が不可欠。

先進企業の多くはDevOpsの推進には最新
のテクノロジーの活用が不可欠と考えて
います。

御社では今後2年間の間に、
DevOpsを支援する
テクノロジーへ投資する
ことを考えていますか？

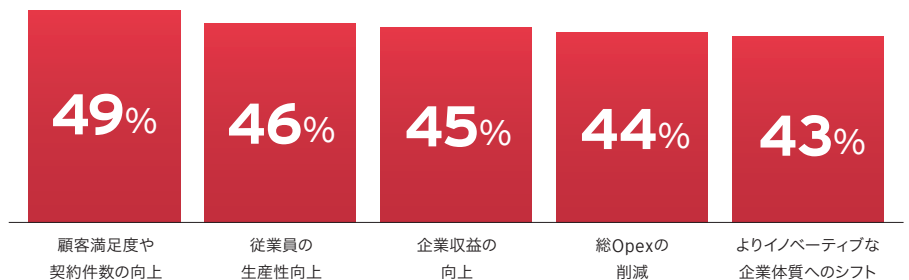


49%の確証:

DevOpsによるメリットは
ビジネス領域に波及。

49%の企業がDevOpsが顧客満足度向上
に貢献すると答え、あらゆるビジネス領域
で効果が現れると考えています。

2017年の終わりまでに、ビジネスに対してDevOpsがどのような
パフォーマンス・メリットを提供すると予想されていますか？



N=220 ソース: 2015年5月のIDCによるIDC DevOps Thought Leadership Survey

今後2年でDevOpsを実現するために重要となってくるテクノロジー

- Dockerなどが稼働するコンテナOS
- コンテナオーケストレーションプラットフォーム
- OpenStackなどのクラウドインフラストラクチャ
- インフラストラクチャモニタリング
- アプリケーションパフォーマンスモニタリング
- 継続的インテグレーション/継続的デリバリー
- デプロイオートメーションや障害検知と自動的な復旧
- 自動的なスケール拡張、自動的なロードバランス

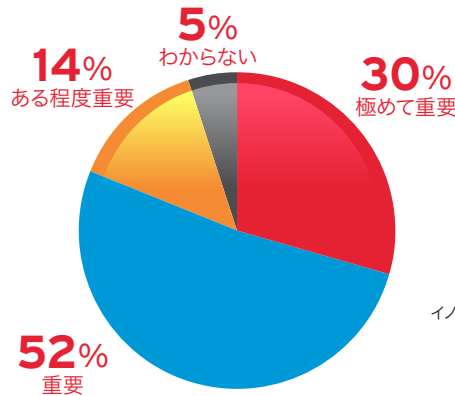


82%の選択:

DevOpsを支えるのは
オープンソース。

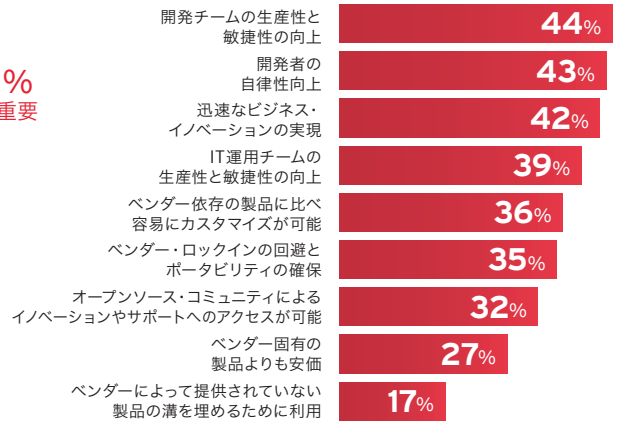
82%の企業がDevOps戦略の根幹を支えるのはオープンソースと回答し、実際に導入を進めています。そしてITの運用効率と生産性を向上させ、ビジネスの変化への俊敏な対応を実現しています。

御社のDevOps戦略の成功において、
オープンソース・テクノロジーは
どれくらい重要ですか？



N=220 ソース: 2015年5月のIDCによる
IDC DevOps Thought Leadership Survey

オープンソースを
DevOps戦略に活用することで
得られる最大のベネフィットは？



DevOps戦略において、オープンソースが重要な役割を果たすと考えている(n=84)

DevOpsは大量のソースコードのリリースを可能にする

10倍 リリースできるソースコードの量は、年間で10倍に増加する

30% 2017年までに30%のプロジェクトはDevOpsを採用する

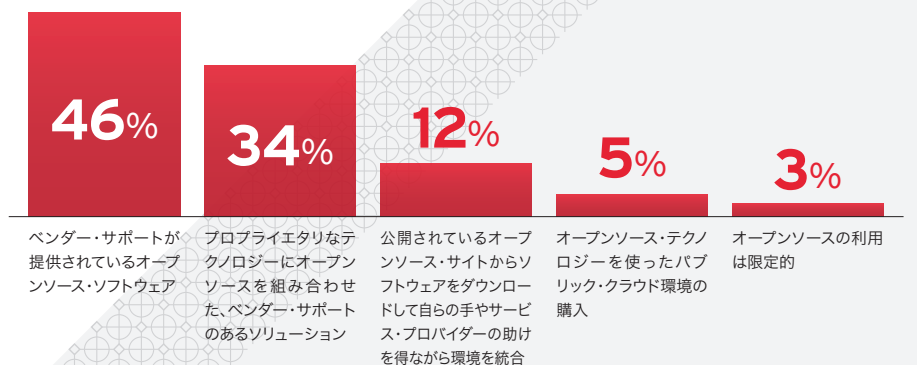
65% レガシーシステムとの統合プロジェクトの65%は、DevOpsを必要とする

80%の実感:

企業でのオープンソース
活用はベンダーとともに。

80%の企業はDevOpsおよびITのプラットフォームでオープンソースを活用するには何らかのカタチでベンダーのサポートが必要だと考えています。

DevOpsを実現するオープンソース・ソリューションを入手/購入するにあたって、
最も御社の戦略にマッチしているものを教えてください。



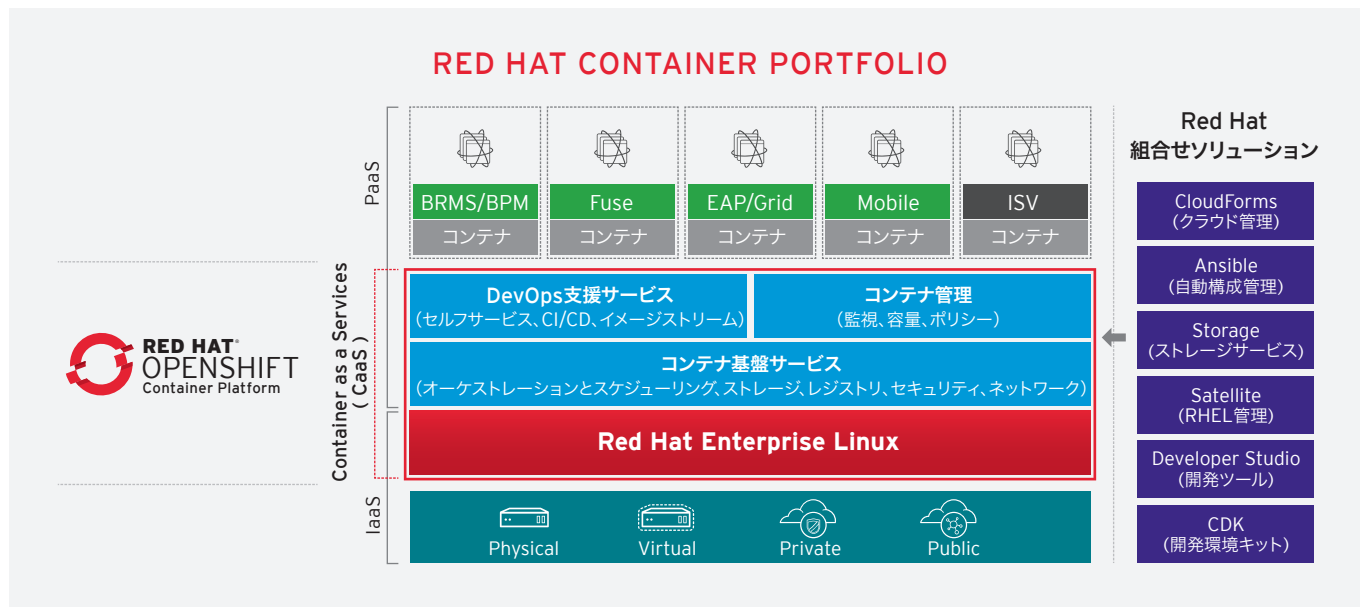
N=220 ソース: 2015年5月のIDCによるIDC DevOps Thought Leadership Survey

レッドハットの実現力:

実績あるテクノロジーをさらに深化させた コンテナソリューションでDevOpsを推進する オープンなプラットフォームを実現。

コンテナの開発と配備、そして運用を自動化:

コンテナを活用する企業のための統型コンテナプラットフォーム



3つのDで普及を加速:

コンテナ技術を企業のプラットフォームで活用するために必要なすべてを提供。

レッドハットを3つのステップでコンテナ技術の普及をはかり、活用を促進するためのワークショップを提供。DevOpsの実現に貢献します。

DevOps ディスカバリーワークショップを国内に提供



Discovery Session (気付きを得る)

DevOpsを実践するための基礎知識と技術要素を整理。ヒアリングから成熟度レベルをまとめ、導入価値を合意形成し、次のフェーズへのステップ確認する。

Design Workshop (適用の設計)

次のフェーズに移るための計画を設計する。導入の進め方や役割、基本的なルールなどの戦略的なガイドラインを形成する。

Engagements (実践)

実践により適用モデルの効果を計測する。課題を整理し、スコアカードを見直し、次のフェーズの検討材料とする。